



## 近代教育錦絵における絵師選定：《文部省発行錦繪》及び《教草》をめぐって

著者	井上 素子
雑誌名	藝叢：筑波大学芸術学研究誌
巻	27
ページ	15-23
発行年	2012-03-01
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2241/00147390">http://hdl.handle.net/2241/00147390</a>

# 近代教育錦絵における絵師選定

——《文部省発行錦繪》及び《教草》をめぐって

井上素子

はじめに

本稿の目的は、明治期の我が国において、技法や思想上の転換期にあった美術と、文部省の啓蒙政策がどのように結び付けられていったかを、当時の就学前児童向け錦絵、いわゆる「教育錦絵」の代表的な作例である《文部省発行錦繪》及び《教草》を例に、そこに携わった絵師を検討することにより、考察することにある。

歌川二代国輝ら複数の絵師の筆により明治6年以降に文部省製本所が刊行した《文部省発行錦繪》は、錦絵104枚を含む点数の多さから、教育錦絵の代表的作例として知られる<sup>①</sup>。筆者はこれまでに美術史学の観点から《文部省発行錦繪》の浮世絵史上の位置づけについて研究を進めており、絵図の典拠や性質について検討してきた<sup>②</sup>。

そこでは、同作が、室町・桃山時代の風俗画の影響を受け江戸時代に成立した浮世絵の木版技法と、政治体制の刷新と共に西洋文化を導入し急速な近代化を目した新政府の啓蒙意識が融合した、転換期ならではの特殊な作品群であり、江戸時代の浮世絵が元来持っていた庶民性、速報性、需給関係に基づく画題や絵師の選定、版元と絵師による生産体制など、多くの点で異なっていることが理解された。

この他、《文部省発行錦繪》に関する論考は、資料の全貌を明らかにした佐藤秀夫氏・中村紀久二氏の調査にあるように、教育史の観点から近代教育の黎明期の教材として位置付けたものを主として<sup>③</sup>、近年では「視覚教育メディア」として考察したものなどがある<sup>④</sup>。

しかし、全ての図に捺された「文部省製本所」印や、二代国輝以外の絵師について等の重要な幾つかの事実は、未詳として議論の埒外にあった観が否めず、本稿では、この時代に制作された、《文部省発行錦繪》と同様の主題を含む錦絵・《教草》とを比較することにより、《文部省発行錦繪》を制作した絵師について考察したい。「教草」は、中世・近世の教育機関であった寺院・寺子屋で初等教育に用いられた往来物にしばしば用いられた名称であり、本稿では、近代教育錦絵が、内容は新時代のものでありながら様式は近代へと継承していることにも注目する。

構成は以下の通りである。

まず、1.では《文部省発行錦繪》を取り上げ、文部省の官報の中に発行の目的を確認し、当時の生活状況や明治7年の教科書翻刻許可といった事情から利用の実態と文部省製本所について検討する。次に2.では《教草》を取り上げ、同作に記された文部官僚・田中芳男の言説に発行の目的を認め、全図の画題と絵師の系譜を確認する。3.では、《文部省発行錦繪》中の二代国輝以外の筆になる図と、《教草》において同様の主題を描いた図との筆致の比較を行い、両者の類似を指摘する。4.では《文部省

発行錦繪》の典拠の一つである文部省『百科全書』翻訳の経緯を整理し、同時期の翻訳局に《教草》の絵師・狩野良信がおり、また良信の師・狩野雅信が、《文部省発行錦繪》のうち職人尽くし絵部分の典拠として推測し得る図の模写を手掛けたことから、その関連性について試論する。以上を通じ、近代教育錦絵における絵師選定の中にどのような政策的視点を見ることができるか、考察を加えたい。

## 1. 《文部省発行錦繪》と文部省製本所

《文部省発行錦繪》(図1、7-8)

法量	大判錦絵、縦104枚
形質	奉書紙
出版	文部省製本所
作者	未詳。一部、歌川二代国輝 <sup>⑤</sup>
制作年	明治6年一
所蔵先	国立国会図書館、筑波大学附属図書館等

《文部省発行錦繪》は、学制の発布と共に家庭教育の必要性を感じていた文部省が、就学前児童の教育のために発行した作品である。刊行が開始された明治6年(1873)は、その前年に発布された「學事獎勵ニ關スル被仰出書」いわゆる学制と、明治12年(1879)に出された教育令との間の時期に当たる<sup>⑥</sup>。これに先立ち、文部省は次の通り趣旨を説明している。

「コノ頃口、当省ニ於テ欧米列国ノ先案ヲ模擬シ、各種ノ絵畫玩具ヲ造リ、遍ク之ヲ播布シ、以テ家庭ノ訓ニ供ス。」

(『文部省報告』「第十六号」明治6年10月4日発行)(傍線筆者)。

また、数日を空けて刊行の目的を、

「幼童家庭ノ教育ヲ助クル為メニ、今般当省に於テ、各種ノ絵畫玩具ヲ製造セシメ、之ヲ以テ幼穉坐臥ノ遊戯ノ具ニ換ヘバ、他日小学就業ノ階梯トモ相成其功少カラザルベク、依テ即今刻成ノ畫四十七種、製造ノ器二品ヲ頒布ス。」

(『文部省布達』明治6年10月7日)

と示している<sup>⑦</sup>。『文部省報告』で言う「先案」とは、具体的には英国のサミュエル・スマイルズ著『自助論』Samuel Smiles (1812-1904), *Self-help*, 1859 や、チェンバース兄弟著『チェンバース・インフォメーション・フォー・ザ・ピープル』William Chambers (1800-1883), Robert Chambers (1802-1871), *Chambers's Information for the people*, 1874 等を示すことが先行研究で明らかになっている<sup>⑧</sup>。「Self-help」については、これを翻訳した中村正直訳『西国立志編』(1871年)の文面が、本作品の詞書とほぼ一致するため、底本として用いられたと推測される<sup>⑨</sup>。

また、図中に「衣喰住之内家職幼繪解之圖」と題され「応需 曜斎国輝」とある作品20点（図1）については、土佐光信《七十一番職人歌合絵巻》、狩野吉信《職人尽図屏風》（16－17世紀作）、菱川師宣《和国諸職絵尽》（1685年）、楳形蕙斎《近世職人尽絵詞》（1806年頃）といった近世以前の職人尽くし絵を継承する様式を示すもので、文明開化以前にあった伝統文化の踏襲を意識した箇所と解釈される。

《文部省発行錦繪》を受容した人々の暮らしぶりを窺い知る史料として、明治初期の写真を参照すると、万国博覧会会場に集った文化人の一行は洋装あるいは洋髪であるが（図2）、職人や徴兵検査を受ける一般市民（図3）には依然として和装・結鬘が見られることから<sup>(10)</sup>、刊行当時の国民生活は、同作品中で『西国立志編』引用箇所描かれた様子よりも「衣喰住之内家職幼繪解之圖」に描かれた様子に近く、後者に対しより親近感を醸成されるものであったろう。即ち、《文部省発行錦繪》は、ある部分では外国の文化を異質なものとしてそのまま導入し、ある部分では伝統的な日本の文化を浮世絵技法によって描くことで、近代的な教育を施す基礎を育もうとしたと解釈される。

次に、《文部省発行錦繪》の図を担当した絵師については、「衣食住之内家職幼繪解図」に「応需 国輝」と書かれ歌川二代国輝が担当したことが分かる以外は、署名が無く、また時代的に改印の制度は終わり、文部省が発行したとあって版元印も示されていないことから、不明である。

全図に共通する特徴として「文部省製本所発行記」という朱字方印が捺されているが、この「製本所」についても従前の研究でその存在が謎とされてきた。製本所の印は、同じ図柄で捺されている版と捺されていない版があり、また「衣食住之内家職幼繪解図」のうち通し番号が欠失している版があることから推して、《文部省発行錦繪》には後版・異版が存在するものと思われる。

他方、この頃文部省は以下の通り文部省発行の教科書を複製することを許可している。

「およそ教育をして普及ならしむるは、書籍の数を増殖し、書籍の価を低下し、その購求に便ずるを以て要とす。よって当省蔵板小学教科にかかる書籍は既に本年第二十五号布達を以て自由翻刻を許せり。今また別表の通り、さらに価額を減じ、当省製本所に於てこれを売与すべし。」

（『文部省報告 第29号』明治7年11月）<sup>(11)</sup>

現存する《文部省発行錦繪》も地方における後版か、民間の製本所であった可能性はないだろうか。今回筆者は改めて当時の文部省の記録、教科書史に関する先学の論考に「文部省製本所」の名を求めたが見出せず<sup>(12)</sup>、教科書の一部や後述する『百科全書』は丸善や有斐閣、東

京書籍等が出版していたものの、現段階で同出版社史からも見出すことは出来なかった<sup>(13)</sup>。

製本所印に関しては、幕末から明治期にかけての浮世絵の版元の状況とも密接に関係する所であり、文部省が明治4年に湯島聖堂内（昌平坂学問所跡）に開かれてから即応に浮世絵を刊行できる態勢を内部に備えたことは想定し難いため、引き続き調査を続けたい。

## 2. 《教草》と博覧会事務局

### 《教草》（図4－6）

法量	30枚；37×50cm
形質	奉書紙
出版	博覧会事務局
作者	溝口月耕、宮本三平、狩野良信等画
制作年	1872(明治5)年－1876(明治9)年
所蔵先	国立国会図書館、東京大学農場博物館等

《教草》という題は、江戸時代の書物である「女文章教草」・「女小學教草」・「西洋教草」などに見られるように、教訓や往来物、すなわち初等教育用の教材を意味する<sup>(14)</sup>。よく知られているものとして福沢諭吉『童蒙をしへ草』があり、これは William Chambers and Roberts Chambers, *The Moral Class-Book*, Chambers's educational course を福沢諭吉が明治5年（1872）に翻訳したものである。西洋の修身道徳の話を集め、児童用の読本としたもので、当時の小学校の教科書として広く用いられた。

本稿で検討するのは、明治6年（1873）に開催された奥国博覧会（オーストリア・ウィーン万国博覧会）に出品するにあたり、その参加準備の段階で、各府県から提出された出品物の図説をもとに博物館が諸産物の製造過程を中心に図解した作品、《教草》（おしえぐさ）である<sup>(15)</sup>。

この《教草》は、1872(明治5)年から1874(明治7)年にかけて34枚製作されたが、この版本のうち、「第一」から「第二十四」図までを明治8年(1875)年7月3日に内務省で火災があったことにより焼失した。焼失分については、同年の9月以降に内容面で校訂増補、図画の訂正などを加えて再刻されている。

当時の博物館設立構想には、博物館としての重要な目的である「実物に即した知識の開明」の他に、更に詳しい資料情報の提供方法として、書籍や絵図類の刊行計画があった<sup>(16)</sup>。《教草》もその一つであり、外袋には田中芳男<sup>(17)</sup>が、日常生活における衣食の原料や製造方法を、子供たちに教えることを目的とすると書いている。これについて東京大学農場博物館の解説では「次世代によるわが国独自の原料作物の品種改良や新しい製造方法の発明に期待を寄せていることも分かる。」と述べられている<sup>(18)</sup>。当時の博覧会事務局が、幼いうちから様々な産物

の概略を知ることが、将来必ず産業の興盛につながると考えたことが窺われる。

図を担当した絵師は多岐にわたる。下に国会図書館が蔵する全30図について、データベース<sup>(19)</sup>を元に画題、撰者、絵師を挙げる。

#### 〈国会図書館蔵版《教草》担当絵師一覧〉

稲米一覧／丹波修治述；溝口月耕画  
糖製一覧／安岡百樹録；中嶋仰山圖  
養蠶手びき草／南部陳撰；宮本三平画  
生絲製法一覧／信夫繁撰；溝口月耕画  
樟蟲製法一覧／信夫繁編撰；菅蒼圃画  
野蠶養法一覧／信夫繁述；菅蒼圃画  
葛布一覧／鶴田清次、佐々井半十郎撰；中嶋仰山画  
苧麻製法一覧／武田昌次述；山崎董[セン]画  
草綿一覧／鶴田清次、佐々井半十郎撰；中嶋仰山画  
製絲草木一覧／武田昌次述；山崎董[セン]画  
素麵一覧／丹波修治述；溝口月耕画  
葛わらひかたくり製粉一覧／丹波修次述；中嶋仰山画  
藍一覧／安岡百樹録；狩野良信圖  
青花紙一覧／山本章夫撰；溝口月耕画  
製茶一覧／加藤景孝編述；中嶋仰山圖画  
烟草一覧／南部陳編撰；狩野良信圖画  
漆製法一覧／武田昌次撰；山崎董[セン]圖  
蒔繪廼教草／加藤景孝識；狩野良信画  
蠟製法一覧／武田昌次述；山崎董[セン]畫  
白柿并柿油一覧／山本章夫撰；溝口月耕畫  
疊表一覧／山本章夫述；溝口月耕画  
香草一覧／丹波修治述；溝口月耕画  
蜜蜂一覧／丹波修治編撰；溝口月耕圖画  
油一覧／武田昌次述；服部雪齋画  
べに一覧／武田昌次述；服部雪齋、山崎董[セン]画  
澱粉一覧上／武田昌次述；服部雪齋画  
澱粉一覧下／武田昌次誌；服部雪齋畫  
褐腐一覧／榊原芳野原稿；武田昌次抄録；服部雪齋画圖  
豆腐一覧／榊原芳野原稿；武田昌次抄録；服部雪齋畫  
鷹狩一覧／町田久成述；菅蒼圃圖

絵師は溝口月耕が8図と最も多く、続いて服部雪齋6図、中嶋仰山4図、山崎董「セン」(※センは三水偏に全)4図、狩野良信3図、菅蒼圃3図、宮本三平1図、となっている。

溝口月耕および宮本三平は川上冬崖の門人で、幕末明治期の画家である<sup>(20)</sup>。彼らがいつ冬崖の門人であったかは明らかになっていないが、冬崖は明治2年(1869)、東京下谷御徒町に居を構え、画塾聴香読画館を開いており、ここで小山正太郎、松岡寿、中丸精十郎ら明治期に活躍した画家達が学んでいる<sup>(21)</sup>。あるいはこの時期に通った

ものであろうか。冬崖はここで蘭書に基づく画法を研究して講義した。その後、明治4年に文部省編集寮に入り『西画指南』を表し、また銅板や石版を手掛けているから、その教授下にあった溝口月耕や宮本三平は江戸時代までに確立されていた特定の流派に学んだ絵師では無かったことが窺われる。服部雪齋(はっとり・せっさい)は、博物図の絵師として知られ、谷文晁門下で田安家の家臣遠坂文擁の弟子であったという<sup>(22)</sup>。中嶋仰山は、洋画や写真も手掛け、明治6年より博物局に出仕し、同16年まで同局で《教草》を手掛けたという<sup>(23)</sup>。山崎董[セン]は、日本画家として南蘋派の山崎董烈に学び、皇居造営に際し杉戸絵を描いた<sup>(24)</sup>。狩野良信については4項にて詳しく述べるが、木挽町狩野派の系譜にある絵師である。菅蒼圃(すが・そうほ)は博覧会事務局付属の磁器製造所の主幹で、陶画工<sup>(25)</sup>。

総じて、《教草》の制作に携わった絵師は、石版・銅版画系、陶板画系、狩野派、谷文晁系など、幅広く集められており、特定の流派・画系にこだわることなく登用されていると言える。

### 3. 画題と筆致の検討

《教草》の画題は、近代国家樹立の上で重要と思われた国内の産業を中心としており、《文部省発行錦繪》に表された図に共通するものが多い。《文部省発行錦繪》では「稲の育成法と用」(5図)、「製茶図」(3図)、「蕨の製法と用」(2図)、「杉の製法と用」(2図)、「養蚕と蚕の用」(3図)がそれに相当し、計16図である。

発行の目的を記した人物、文部省博覧会御用掛であった田中芳男は慶応2年(1866年)パリ万国博覧会へ出張を命ぜられ、その必要性を痛感し、明治3年(1870)大学出仕を命ぜられ太政官委任となると、物産局を起こすべく命を受け、設計を行い、新築する。殖産興業の発展を計るため、博覧会開設の必要性を主唱し、同6年(1873)にウィーン万国博覧会へ一級事務官として派遣された。同地で金鯱等を展示し大きな注目を集めたことはよく知られる。

田中の主張する殖産興業を目的とした幼児教育という視点は、《文部省発行錦繪》に共通するものであり、発行開始時期こそ《教草》明治5年~に対し《文部省発行錦繪》明治6年~と、一年のずれがあるものの、継続的に発行された期間は重複している。

ところで、これらの作品は就学前児童を対象にしたものであるが、日本初の「幼稚園」、東京女子師範学校付属幼稚園がドイツ人のクララ・チーテルマン(Clara Louise Zitelmann, 1853-1931)を主席保母として開園したのは明治9年11月である<sup>(26)</sup>。保育内容は整列、唱歌、修身、説話、戸外遊び、体操などで、《文部省発行錦繪》の内容

でも〔教訓道德図〕、〔西洋器械發明家図〕、幼童絵解運動養生論説示図、〔器械体操組立図〕が大よそそれに添ったものであることを鑑みるに、幼稚園が制度として整う以前に、先行し家庭で教育する予備的段階として想定されたことが窺われる。ただし、東京女子師範学校付属幼稚園の入園資格は原則として「男女を論ぜず年齢3年以上満6年以下」とされたものの、優れた設備に伴う経費も要したため、「園児は上流階級の子弟がほとんどで、馬車や人力車等でお付き女中に伴われて通園していたことが特に印象的だった」と最初の保母の一人豊田扶雄が述懐している<sup>(27)</sup>ように、当時の幼児教育の普及率は低かった。参考までに明治6年の学齡児童・生徒の就学率を引いてみると、男子39.90%、女史15.14%、計28.13%となっている<sup>(28)</sup>。《文部省發行錦繪》は最初、各都道府県に1部ずつ頒布されたが、実際には限定的な階層によって使用されたことが推測される。

次に、《文部省發行錦繪》と《教草》で画題を同じくする図について、筆致の比較を試みる。《文部省發行錦繪》104図は、実査および図版の比較検討の結果、表現上の特徴として、筆致・配色・描法・形態的要素・構図などの点で、六つの傾向が見られ<sup>(29)</sup>、ある程度画題に対応している。それぞれを制作した絵師をA-Eと仮称することにする。枚数は、二代国輝30枚、A 5枚、B 31枚、C 15枚、D 7枚、E 16枚、計104枚である。この内、前述の重複する画題を扱ったものでは、「稲の成育法と用」(図8、絵師A)、「製茶図」(二代国輝)、「蕨の製法と用」(二代国輝)、「杉の製法と用」(二代国輝)、「養蚕と蕨の用」(図7、絵師B)がある。二代国輝は幕末から養蚕図を多く手掛けており<sup>(30)</sup>、ここでもその力量を発揮している。絵師の名前が明らかになっている二代国輝以外の図については、描写に稚拙さ、ぎこちなさが観取され、ハッチングや陰影、立体感の出し方に、従来の浮世絵技法には無いものが観取される。《教草》でも同様に筆のぎこちなさは感じられるものの、植物や器具の描写には博物図的な写実性を重視した精緻な観察眼が働いているようである。一方で、人物の描写については《教草》に登場する人物と《文部省發行錦繪》の絵師A、Bには類似する特徴が見受けられる。

人物は、左向きの場合に鋭角的な顎であるが(図13-15)、右向きの場合は下あごに丸みを帯びる(図9、13-15)。女性の顔にはほのかな紅を挿し(図13-15)、横顔の眼の描き方に平板な印象を受ける(図9-10)。老人の描写では髪型・額や首の皺・耳の形状が相似する。また全体に画面に直線が多用される(図4-8)。場面設定に関しては、《文部省發行錦繪》「稲の成育法と用1」に描かれた水田の様子、人物の動作は《教草》「稲米一覧」(溝口月耕画)と共通するものが多い。《文部省發行錦繪》「養蚕と蚕の用」1に描かれた絹織物の製造工程

は、《教草》のほうが詳細に亘るが、女性が労働の中心となって傍らに子を養いながら製造される様子(図5、7)、細部まで描き込まれた機織り機(図6、15)といった特徴を共有している。

以上の点から、両者は、発行の主体、時代、技法、対象、目的、そして図様などにおいて、同様の性質を持つ錦絵作品群であると考えられる。

#### 4. 博物局付絵師 狩野良信をめぐって

1項で述べた文部省が《文部省發行錦繪》刊行に際し「模擬」した「先案」である『チェンバーズ・インフォメーション・フォ・ザ・ピープル』は、近代的な啓蒙書として同時期に翻訳が進められていた。本項では、《文部省發行錦繪》と《教草》をめぐり背景の一つとして、『百科全書』の翻訳について述べる。

同書は、1833-35年、イギリスのエジンバラで第一版が刊行された。貧困層に良質の読書の機会を提供するというウィリアム・チェンバースの夢を実現するための事業で、一種の百科事典であるが、最初の1年で7万部を売り上げる好評を博し、以後版を重ねた<sup>(31)</sup>。1842年に刊行された第二版の冒頭には、「多くの中産階級とすべての労働者階級」の人を「見識ある人」にすることを目的とし、独学的手段として役立つことであると述べられている<sup>(32)</sup>。その教育観に注目した文部省編集寮の編集頭であった・箕作麟祥(みつくり・りんしょう)<sup>(33)</sup>は、明治4年に同寮に洋学者を動員して第4版を翻訳開始した。実際の推進は、明治6年(1873)11月24日より文部省に出仕し編書課長となり、文部省内で儒教主義的徳育の強化政策を担った西村茂樹が行った<sup>(34)</sup>。後に第5版が導入され、完成した『百科全書派』第4版・第5版を合わせて1つのシリーズにしたものとなった。原本は、開成学校教師グイド・フルベッキ(Guido Herman Fridolin Verbeck, 1830-1898)が持ってきたという説、福沢諭吉が旧蔵したという説などがある<sup>(35)</sup>。

更にこの間に、中国においても同書の翻訳が進められており、そこから孫引きする形で翻訳された書物も後に『百科全書 重学』の名称で出版されている。経緯をまとめると以下ようになる。

#### 日本版『百科全書』

1833-35	原書、第一版	イギリスで刊行
1842	第二版刊行	
1848-49	第三版刊行	
1857	第四版刊行	
1871	文部省編集寮編集頭・箕作麟祥、洋学者を動員し翻訳開始	
1873-83	文部省から5項目毎の分冊で刊行	

1874-75 第五版刊行

中国版「百科全書 重学」

- |         |  |
|---------|--|
| 1857-58 | 中国、アレクサンダー・ワイリーが漢訳し「六号叢談」付録「重学浅説」として刊行 |
| 1859    | 日本、開成所 蕃書調所が翻訳出版<br>単行本「官版 重学浅説」       |
| 1860    | 民間業者により出版                              |
| 1878    | 後藤達三訳「百科全書 重学」                         |

かくして《文部省発行錦繪》の一部には、“Chambers's Information for the people”が企図した啓蒙の視点と手法が導入されることになったわけであるが、箕作が同書の翻訳を精力的に進めていた時期、翻訳局付きの絵師として狩野良信が居たという<sup>(36)</sup>。明治6年(1873)、文部省編書課長となった西村茂樹は次のように書いている。

「文部省創立以来、首として中学、小学の課業書を編輯せざるべからざることと定めたけれども、未だ其方を得ず。又前文部卿大木喬任氏の時より、種々の書の編纂に着手し、頃る粉雑の観あり。(中略)又前文部卿の時より『百科全書』の編あり是は英人チャンパー氏の原書を訳するものにして、其役者は本省の官吏に限らず広く世界の洋学者に托す。是又脱稿の上本課にて是を校正して出版するなり。(中略)本課に属する画家に狩野良信、北川有卿あり、板下書には松下甲太郎あり。」(傍線筆者)

狩野良信(かのう・よしのぶ、りょうしん/1848-?)はこれまで美術史学で研究の俎上に上がったことが無く、以下に示す情報のみが明らかにされるに留まっている。

明治時代の日本画家で、嘉永元年5月17日生まれ。奥絵師・木挽町狩野派の狩野雅信(ただのぶ)に学び、同門に狩野芳崖や橋本雅邦らがいる。博覧会事務局、文部省などに勤めた。明治15、17年の内国絵画共進会に出品し受賞。号は芳春斎。作品に「孔雀ニ牡丹」「武者」など。3項で紹介したように、博物局刊行「教草」の挿図を描いた。弟子に吉川霊華がいる<sup>(37)</sup>。

こうした良信の活躍は、編集寮・翻訳局で《文部省発行錦繪》の典拠となる翻訳書が制作される一方で、同局に属する絵師が《教草》の作図を行っていたことを窺わせるのである。本論3.で検討したように、《教草》の図と《文部省発行錦繪》の絵師A、Bの図を比較すると、完全な一致とは言い切れないものの、類似する傾向が見られ(図9-15)、《教草》担当絵師の何人かが、同様の画題・性質を有する《文部省発行錦繪》の図を制作した可能性が浮かび上がってくる。

なお、石井研堂氏は1969年の時点で、未だ全容が明ら

かになっていなかった《文部省発行錦繪》と《教草》の一部について自身の所蔵作品の中から紹介し、《文部省発行錦繪》の絵師が「中嶋仰山・服部雪齋などの中と思はるゝが、記名なし。」と推測されている<sup>(38)</sup>。

更に、《文部省発行錦繪》のうち、「衣喰住之内家職幼繪解之圖」(図1)が江戸時代からの職人尽くし絵の伝統に則っていることは既に述べたが、その一部の典拠として考えうる土佐光信(1434-1525)筆《七十一番職人歌合絵巻》は、狩野良信の師である狩野雅信によって弘化3年(1846)に模写されている(東京国立博物館蔵版)<sup>(39)</sup>。狩野派が画技の修練・画風の継承のために粉本や模写を重視したことはよく知られる通りである。

二代国輝が「衣喰住之内家職幼繪解之圖」を描く際に、実際の建築現場から写生したのではないことが先行研究によって指摘されており<sup>(40)</sup>、何らかの粉本の存在が想定されるが、あるいは《文部省発行錦繪》を描いた二代国輝が、同様の教育錦絵《教草》に携わっていた狩野良信に謁する機会があり、そこを経由して模写に接する機会があったとは考えられないだろうか。

## まとめ

本稿では、《文部省発行錦繪》と《教草》に関わった絵師を比較検討することにより、明治初期の絵師達と文部省の啓蒙制作との接点について論じた。

これらの教育錦絵は共に、発行の時期、将来的な殖産興業という目的、就学前児童の家庭教育という対象、当時まだ利用者にとって身近であった木版画という技術、そして主題など、多くの点で共通する特徴が見出せた。同様の主題について比較すると、筆致の類似する作例が存在することから、これまで未詳とされてきた《文部省発行錦繪》の絵師として《教草》の絵師群が推測し得ないか、議論の提起を試みた。また《教草》を描いた狩野良信は、《文部省発行錦繪》の典拠となった『百科全書』や職人尽くし絵との関連性が窺われた。

明治期、東京美術学校の教授選任や勲章の授与において、文部省は画派や東西のバランスに配慮したことはよく知られている。《文部省発行錦繪》という政策を反映した作品において、歌川派の絵師以外に誰が選ばれたのかという事実は、近代美術史学上の浮世絵と他の様々な流派の絵師との関係など、意味のある論点をもたらしものであると思われ、引き続き調査を続けたい。

- 
- (1) 《文部省発行錦繪》に焦点を絞り考察した論考として、例えば岡野素子「《文部省発行錦繪》の研究」『日本美術研究 第二号』筑波大学日本美術史研究室、17-32頁、2002年。
  - (2) 井上素子「《文部省発行錦繪》の典拠に関する一考察」

- 『芸術学研究』16号、筑波大学大学院人間総合科学研究科博士後期課程芸術専攻発行、2012年、101-110頁。
- (3) 例えば中村紀久二「幼童家庭教育用絵画 解題」佐藤秀夫・中村紀久二編『文部省掛図総覧二』東京書籍、1986年、5-7頁。唐沢富太郎『図説明治百年の児童史』講談社、1967年、192-195頁。
- (4) 古屋貴子「明治初期の視覚教育メディアに関する考察：教育史における文部省発行教育用絵図の位置づけをめぐって」『生涯学習・社会教育学研究』31号、2006年、73-82頁。
- (5) 1829-1874年。三代豊国の門人。文久から明治初期に活躍した。画姓は歌川、本名山田国次郎、画号には二代国綱、一蘭斎、一雄斎、一曜斎、曜斎がある。慶応元年（1865）頃二代国綱を襲名、作画期は嘉永より歿去直前までである（国際浮世絵学会編『浮世絵大事典』東京堂出版、2008年、55頁、および樋口弘『幕末明治開化期の錦繪版畫』味燈書屋 1943年、13-14頁、72頁を参照した）。
- (6) 「學事獎勵ニ關スル被仰出書」『太政官布告 第二百十四號』（内閣官報局編『法令全書』第7冊、1872年、146頁）、「学制廃止教育令制定」『太政官布告第四十号』（同第14冊、1879年、75頁）。
- (7) 下川歌史編・家庭総合研究会『明治・大正家庭史年表』（河出書房新社、2000年、59頁）では、10月7日の『文部省布達』を以て「幼児家庭教育のため文部省が玩具、絵画を製造、希望の向きに払い下げる。」としており、発行日は『布達』の出された日と解す場合がある。
- (8) 中村氏、前掲書3、5頁。
- (9) 岡野、前掲書1、22-23頁。
- (10) 東洋文化協会編『幕末明治大正 回顧八十年史 第5輯～第8輯』東洋文化協会、1868-1891。図版は第5輯127頁、第6輯117頁。
- (11) 新政府の政策を伝え啓蒙したことで知られる日進堂『新聞雑誌』明治7年11月22日付でも広く周知されている（明治ニュース事典編纂委員会、コミュニケーションズ出版部『明治ニュース事典 第1巻 慶応4年-明治10年』株式会社毎日コミュニケーションズ、1983年、155頁）。
- (12) 文部省の記録及び教育史学分野における調査は国立教育研究所において1986年時点でなされ、佐藤氏・中村氏による前掲書3、で不明と述べられている。本論文執筆に際し、『教科書の変遷—東京書籍五十年の歩み』（東京書籍、1959年）、東京製本紙工業協同組合編『東京製本紙工業協同組合六十五周年記念史』（東京製本紙工業協同組合、1966年）、文部省編『文部省刊行物制作便覧』（教育出版、1952年）等の製本史関連書ほか、教育史学分野で後に出版された『新教育学大事典』（第一法規出版、1990年）等の資料を調査したが、管見の限り「文部省製本所」に関する記述は見出せなかった。
- (13) 『丸善百年史』（丸善、1980年）、『有斐閣百年史』（有斐閣、1980年）。
- (14) 東京大学農場博物館「第二（旧第1犢（こうし）房）ブース 解説〈教草〉、2007年。
- (15) 現存する資料として、まとまった点数が国立国会図書館、東京大学農場博物館、早稲田大学図書館、国立公文書館等に所蔵されており、これらの絵図資料が含まれる「公文録」は、国の重要文化財に指定されている。
- (16) 柿崎博孝「館蔵資料の紹介 教草 第12 葛粉一覧」『全人』NO.661、玉川大学出版部、2003年8月号。
- (17) 1838-1916年。幕末から明治時代に活躍した博物学者、物産学者。産物の研究を推進し、日本の農林水産業を近代化した。文久元年（1861）江戸に出、蕃書調所物産学出仕、慶応二年（1868）仏国大博覧会・明治5年（1872）奥国博覧会御用掛、以後多くの外国博覧会に参加、また内国勸業博覧会をたびたび開催。動物園、植物園を構想し、上野で実現。貴族院議員、男爵（木村陽二郎「田中芳男」『日本近現代人名辞典』吉川弘文館、2001年、645頁を参照した）。
- (18) 農場博物館、前掲書14。
- (19) NDL-OPAC（国立国会図書館蔵書検索・申込システム）、2011年10月20日時点データより引用した。
- (20) 樋口弘「幕末明治の浮世絵師伝」『幕末明治の浮世絵集成』1962年改訂増補版、味燈書屋、1962年、88頁。
- (21) 山梨県立美術館『近代日本洋画の源流 中丸精十郎とその時代』山梨県立美術館、1988年、36頁。
- (22) 1807-？。江戸後期-明治時代の画家。博物画で知られ、天保15年（1844）武蔵石寿の貝類図鑑『目八譜』、安政元年万花園著「朝顔三十六花撰」の挿絵を描いた。維新後も動植物画家として活躍。明治10年（1877）、71歳の時の作品がある（上田正昭・西澤潤一・平山郁夫・三浦朱門監修『日本人名大辞典』講談社、2001年、1507頁）。
- (23) 石井研堂著・明治文化研究会編『明治文化全集 別巻 明治事物起源 上巻』日本評論社、1969年、484頁。中嶋仰山の生年は、同書中で「（明治）17年刊〔明治畫家略傳〕にも、『天保三年（1832）七月生れ幕臣にて岡田鶴川の門人なり、花鳥畫家として名あり』と見ゆ」と紹介されている（括弧は筆者）。没年は門人談として大正3年（1914）とされる。
- (24) 1817-1893。別号に青演道人。古骨道人（前掲書22、1967頁）。
- (25) 生没年不詳。明治時代の陶画工。明治6年（1873）のウィーン万国博覧会に出品のため、その前年東京浅草に設けられた博覧会事務局付属の磁器製造所の主幹となる。服部杏圃（きょうほ）とともに各地から集められた陶画工を指揮し、絵付けを行った（前掲書22、996頁）。
- (26) 梅根悟監修・世界教育史研究会編『世界教育史大系21・幼児教育史』講談社、1974年、331-334、347-351頁。
- (27) 前掲書26、333-334頁。
- (28) 細谷俊夫ほか編「教育統計；学齡児童・生徒の就学状況；32.学齡児童・生徒；表32-1学齡児童数及び就学率」

『新教育学大事典 題8巻』第一法規出版、1990年、150頁。

- (29) 岡野、前掲書1、19－21頁。以下に画題・筆致の分類のみ転載する。

1. 衣喰住之内家職幼繪解之圖	20枚	曜齋國輝
2. 農林養蚕図うち茶・蕨・杉の用	8枚	曜齋國輝
うち稲の成育法と用	5枚	A
うち養蚕と蚕の用	3枚	B
3. [教訓道德図]	10枚	B
うち [早朝の掃除]	1枚	D
4. [西洋器械發明家図]	15枚	C
5. [数理図]	6枚	D
6. [木挺・滑車図]	16枚	B
7. [空気浮力図]	2枚	B
8. 幼童絵解運動養生論説示図	2枚	曜齋國輝画
9. [器械体操組立図]	3枚	E
10. [馬車組立図]	3枚	E
11. [西洋人形着せ替図]	10枚	E

- (30) 井上、前掲書2、頁数未定「三 歌川二代国輝の画業」。

- (31) 松永俊男“CHAMBERS’S INFORMATION FOR THE PEOPLE”別冊日本語解説「チェンバーズ『インフォメーション』と文部省『百科全書』について」EUREKA PRESS、2005年、5－6頁。

- (32) 原文 WILLIAM AND ROBERT CHAMBERS, CHAMBERS’S INFORMATION FOR THE PEOPLE, SECOND EDITION, W. & R. CHAMBERS, EDINBURGH, 1842。本稿では松永俊男氏による翻訳を引用した（前掲書31、5頁）。

- (33) 1846－1897。明治時代の洋学者・啓蒙的官僚・法学者。蘭学者・箕作阮甫の孫。阮甫について蘭学を学び、漢学、英学も修める。文久元年（1861）蕃書調所に出仕、祖父を継いで幕臣に列せられ外国奉公翻訳方につとめ、慶応3年（1867）パリ万国博覧会派遣使節徳川昭武一行に従ってフランスに留学。明治元年（1868）帰国、新政府に招かれ明治2年翻訳御用掛となる。家塾を開き、中江兆民らが学ぶ。翌年編集寮専務。明治6年（1873）翻訳局長。欧米諸法典の翻訳編纂に当たり、明六社員として啓蒙活動にも力を注いだ。東京学士院会員・元老院議員・法典調査会主査委

員・貴院議員。行政裁判所長官などを歴任（田崎哲郎「箕作麟祥」、前掲書17、1017頁を参照した）。

- (34) 福鎌達夫『明治初期百科全書の研究』風間書房、1968年、343－345頁。杉村武『近代日本大出版事業史』出版ニュース社、1967年、118－121頁。西村の出仕時期に関しては『近代日本総合年表』岩波書店、2001年、57頁。

- (35) 書誌学的検討は前掲書34、福鎌氏（41－45頁）、杉村氏（138－140頁）に詳しい。

- (36) 引用元は西村先生伝記編纂会編『泊翁西村茂樹伝 上巻』日本弘道会、1933年、378頁。西村茂樹任官に関しては杉村氏、前掲書34、119頁を参照した。

- (37) 狩野良信については、前掲書22、537頁。吉川霊華（きっかわ・れいか／1875－1929）は日本画家。復古大和絵を研究。大正5年に鎬木清方らと金鈴社を興す（前掲書22、616頁）。

- (38) 石井氏、前掲書23、483頁。

- (39) 全3巻、紙本着色。月左歌・右歌、判詞、恋左歌・右歌、判詞、その後左右の職人像が描かれている。巻末に弘化3年（1846）に模写した法印養信・法眼雅信の名とともに「右絵之詞道遥叟（三条西実隆）之花翰也」「職人尽歌合三巻 土佐光信筆」と極書されている。（石山洋解説『江戸科学古典叢書六 七十一番職人歌合／職人尽絵／彩画職人部類』恒和出版、1977年、解説22頁を参照した）。

- (40) 西和夫「明治六年の住宅建設絵解き」『神奈川大学二一世紀 COE プログラム「人類文化研究のための非文字資料の体系化」研究成果報告書 非文字資料から人類文化へ——研究参画者論文集——』神奈川大学21世紀 COE プログラム研究推進会議、2008年、3－5頁。

〔図版典拠〕

図1、7、8、10、12、14、15 筑波大学附属図書館

図2－3 東洋文化協会編『幕末明治大正 回顧八十年史』東洋文化協会、1868－1891第5輯127頁、第6輯117頁

図4－6、9、11、13 早稲田大学図書館特別資料室

（いのうえ もとこ）





図1 《文部省発行錦繪》  
[衣喰住之内家職  
幼繪解之圖] 歌川  
二代国輝画

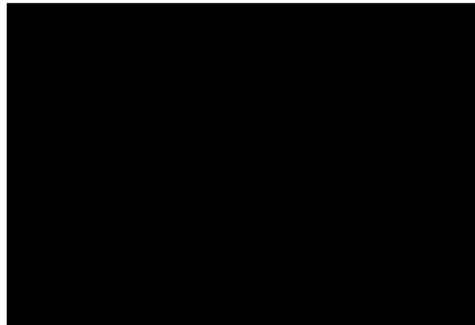


図2 「明治5年3月お茶の水聖堂で催  
された最初の博覧会」写真

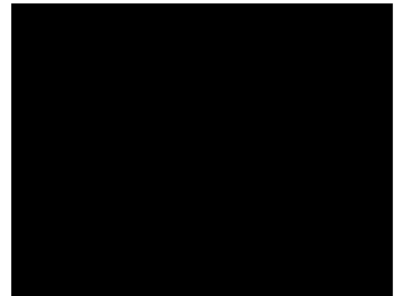


図3 「我国最初の徴兵検査」  
(明治7年4月) 写真

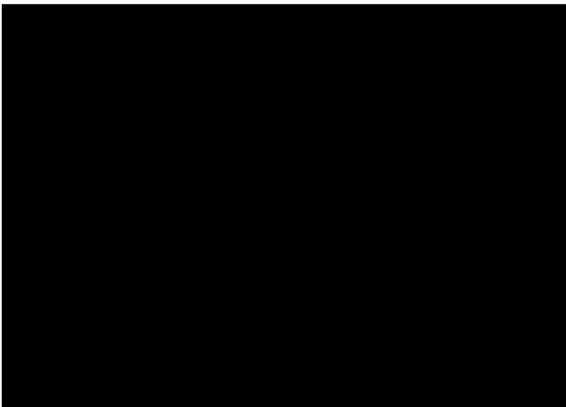


図4 《教草》[烟草一覽] 狩野良信画

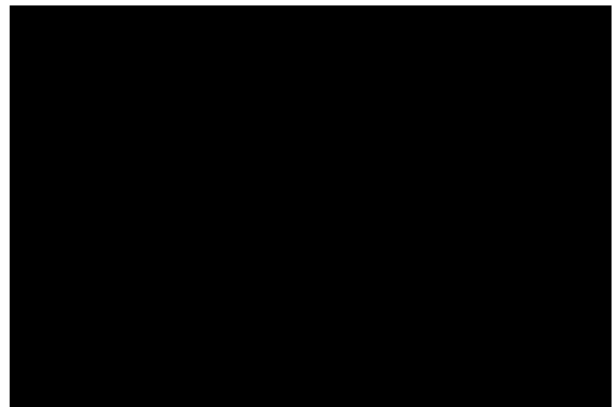


図5 《教草》[養蠶一覽] 宮本三平画

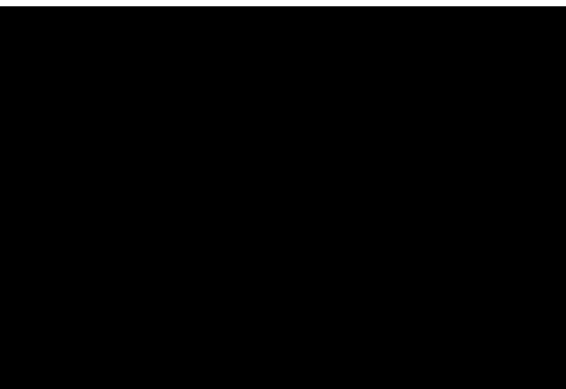


図6 《教草》[草綿一覽] 中嶋仰山画

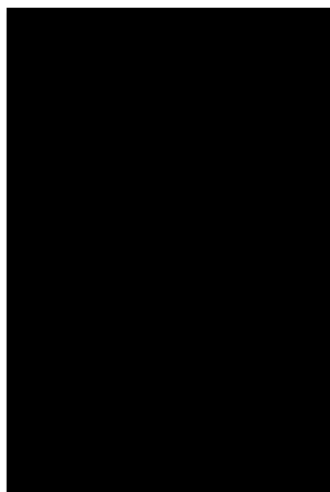


図7 《文部省発行錦繪》  
[養蚕と蕨の用] 1 絵師未詳



図8 《文部省発行錦繪》  
[稻の成育法と用] 1 絵師未詳



図9 《教草》[草綿一覧] 部分

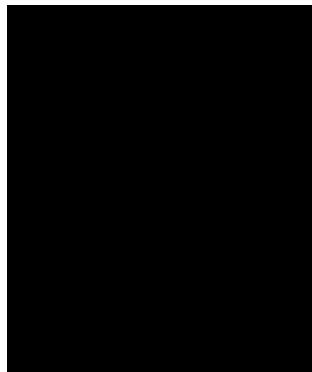


図10 《文部省発行錦繪》  
[養蚕と蕨の用] 1 部分

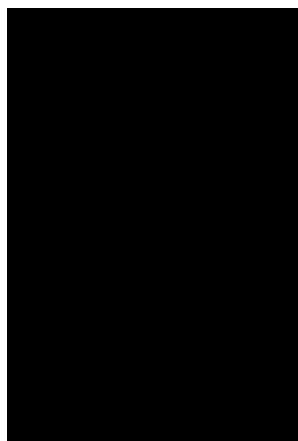


図11 《教草》[養蠶一覧]  
部分

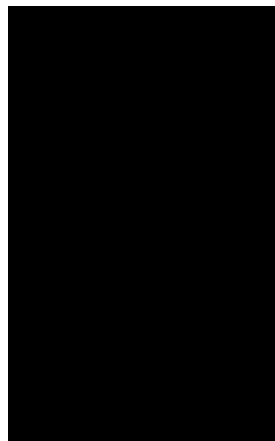


図12 《文部省発行錦繪》  
[稲の成育法と用]  
1 部分



図13 《教草》[養蠶  
一覧] 部分

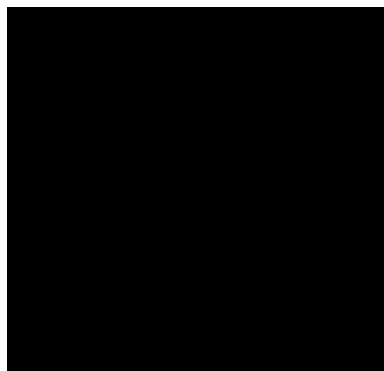


図14 《文部省発行錦繪》[養  
蚕と蕨の用] 1 部分

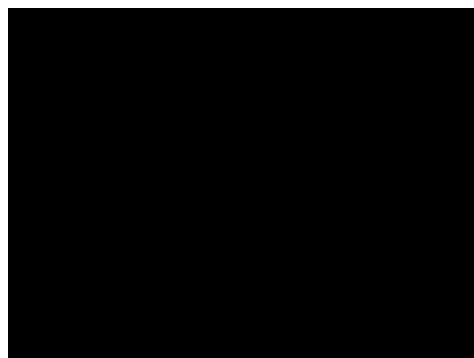


図15 《文部省発行錦繪》[養蚕と蕨の  
用] 2 部分